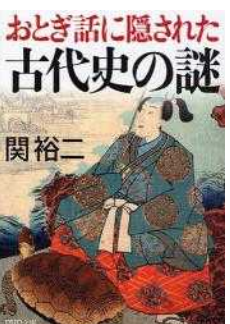


# 「おとぎ話に隠された古代史の謎」

関 裕二著

「古代史」と「おとぎ話」につられて本を手にしていました。「古代」と「昔々」に謎がくっついている。それだけでワクワクしながら読み始めていました。歴史に興味を持ち始めたのは四十年位も前のこと。山の上にあるお寺を見に行こうと誘われて、山登りの大好きな私は喜んで参加しました。山頂付近の寺院、山門へと続く道、お寺の大きな柱と白壁を今も覚えています。百年、二百年、時の流れと建立に関わった人々の思いが感じられました。その時から日本の古代史や建国の歴史に興味を持つようになりました。おとぎ話にであったのは、小学校五、六年で図書委員になったときでした。当時は、とても美しく装丁された絵本でした。「上級生になって読む本ではありません」等、注意されても何度も読んだ記憶があります。そのおとぎ話と古代史がくっついてしまいました。古代史実として残せなかったことを「童話」「童謡」の詞に織り込んで後世に伝えたいという考えです。知識不足から、「？」や理解できないところも在りましたが、伝えられた歴史の裏に、伝えられなかった別の歴史を感じて楽しく読み終えました。大昔の日本は、違った文化、文明を持つ小さな国が幾つか存在したのだろうと考えられます。本質の違う文化が出会ったとき、馴染んで取り入れるのか、取り込まれるのか、又は、反発して一方が消えてしまうのか未だ判断できません。私の生活に日本人としての名残があるのだろうかと考えました。

聰子



P H P 文庫

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞